

第22回 文学館演習 ―日本近代文学資料の探索と処理―

2018年度 講義概要

2018年8月21日(火)～8月25日(土) 於：日本近代文学館講堂

近代文学の勉強法を知りたい人は必修！
使用する資料はすべて本物です！
博物館実習・近代文学の単位にできます！

講義概要

1. 総論

①近代文学館とは
坂上弘（館理専長）

②日本近代文学館の所蔵資料とその意義
中島国彦（早稲田大学名誉教授）

50年以上もの歴史の中で、当館にはおびただしい資料が収蔵されることになった。資料を守る、それを後世に伝える、その強い意志がすばらしいコレクションを生み出している。資料は「もの」ではない。それに対する「敬意」とそこから生まれる「文学へのよろこび」があって初めて、光り輝やく。その歴史を振り返り、将来への展望を考えていきたい。

2. 資料の収集と活用

①資料を活用する研究法（講義・演習） 自筆資料（書簡・ノート）
安藤宏（東京大学教授）

近代文学の資料は「活字」になったものとならなかったものとの間に決定的な性格の違いがある。書簡、日記、メモ、ノートなど、「活字」にはならなかった直筆資料と、実際に世に問われた作品との関係をどのように論じるか、というのは研究の大きな課題で、自覚的な方法意識が求められる。作者の直筆資料を調査、研究する方法について、館に収蔵されている太宰治の資料を中心に、わかりやすく解説したい。

②資料を活用する研究法（講義・演習） 図書
東郷克美（早稲田大学名誉教授）

作家の個人全集について考える。作家没後の本格的全集には、その本文の選定・配列・注記など、担当の編集委員・研究者などの当該作家・作品に対する一貫した解釈と文献学的方法意識が集約的に反映されているはずである。今回は北村透谷・樋口一葉・宮沢賢治をはじめとする特色ある全集編纂の歴史を概観するとともに、戦後の太宰治・井伏鱒二の全集成立事情や最近完結した夏目漱石・谷崎潤一郎の新全集にもふれてみたい。

③資料を活用する研究法（講義・演習） 雑誌
宗像和重（早稲田大学教授）

近代文学の作品は、一般に、雑誌や新聞などに発表され（初出）、著者の推敲を経て、あらためて単行本として刊行される（初版・初刊）。その間に、本文の異同が生じることも少なくないが、こうした原稿から初出、そして著書へという本文の位置づけを、どう考えればよいだろうか。また、雑誌は単に作品発表の場であるだけでなく、明治期の『早稲田文学』や『文章世界』が自然主義の牙城となったように、その性格や編集方針、あるいは編集者が作品と密接に関わることも多い。文字通り、「雑誌の宝庫」である日本近代文学館の資料を中心として、こうした雑誌と近代文学との関わりを考えてみたい。

④資料を活用する研究法（講義・演習） 新聞
日高昭二（神奈川大学名誉教授）

新聞に連載された小説は、そこに挿絵が挿入されることで、どのような問題が生まれるのか。文字と挿絵が一つの空間を占めるこの事態は、必ずしも調和的とは限らず、むしろその非対称性や違和を現出することもあるだろう。一日ごとに新聞小説に向き合う読者の反応を想定しながら、そのつどスペース・ドラマを惹起しているこのジャンルの意味を新たに見直してみよう。文学館所蔵の菊池寛・上司小剣など大正期の新聞小説をとりあげて考えてみる。

資料の

声を聞く―

2017年 開館50年

公益財団法人 日本近代文学館

THE MUSEUM OF MODERN JAPANESE LITERATURE
Komaba, TOKYO



153-0041 東京都目黒区駒場 4-3-55

(駒場公園内)

tel 03-3468-4181

<http://www.bungakukan.or.jp/>

図書・雑誌の利用（実習）

書庫には、日本近代文学館にしか所蔵されていない貴重な図書・雑誌が数多くあります。普段は職員以外の入庫はできませんが、演習日は特別です。②・③の講義をふまえ、実際に書庫に入って図書・雑誌を手にとり、自由なテーマでミニレポートを書いてみましょう。（スリッパ持参ください）

挿絵・写真資料の調査・保存（実習）

文学館で所蔵している雑誌の中から、挿絵・写真ページをピックアップし、写真利用カードを作ります。出版物やテレビ番組などで利用される文学写真の、整理方法の一例です。

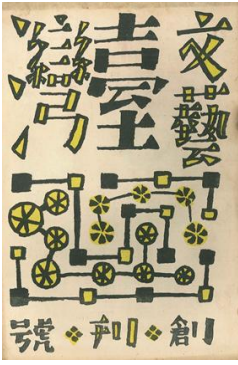
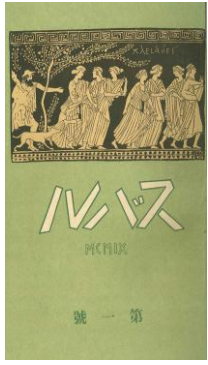
肉筆資料の解説（実習）

所蔵する肉筆資料を公開する機会を設けることも、文学館の大切な仕事です。この時間では館報「日本近代文学館」の例にならって文学者の手紙を翻刻してみましょ。くずし字解説に挑戦！

3. 文学をめぐる問題

①海外における日本文学の研究（講義・演習）
 和田博文（東京女子大学教授）

海外の研究者との国際的共同研究は、ここ十年ほどの間に活性化してきた。今年度は昭和文学会と台湾日本語学会の姉妹学会締結について紹介する。また日本と台湾の研究者による『コレクション・台湾のモダニズム』に触れながら、東アジアのエリアにおける研究の今後を展望する。



②文学と大衆・女性（講義・演習）
 宮内淳子（近代文学研究者）

大正から昭和にかけて、教育の普及や出版事業の拡大により読書習慣が国民に広まり、文学は男性エリートの占有でなくなる。書き手や読み手の変質を具体的にみるため、同時期の浅草という盛り場に関し、文芸誌や総合誌の取り上げ方と、読者層の違う大衆誌や婦人雑誌等の取材ぶりとを比較し、小説家の描く「大衆」「女性」イメージが進行していた新しい動きに運動していたかどうか、なるべく多種類の雑誌を紹介しつつ、考えたい。



4. 文学の周辺(1)
 ①文学と戯曲（講義・演習）
 石川巧（立教大学教授）

1970年代までの文芸雑誌には小説と同じように著名作家の戯曲が並んでいた。なかには上演を目的とした作品もあったが、主流はいわゆるレーゼドラマ（読む戯曲）だった。当時の読者は活字を通して仮想空間を組み立て、目に見えない劇場で演じられる世界を愉しむことができたのである。また、新しい世代には同じ内容の作品を小説と戯曲に書き分けたり、ひとつの作品に小説と戯曲の表現を混在させたりする作家もいる。だが、近代文学研究の領域においてレーゼドラマが考察の対象となることは極めて稀である。この講義では木下杢太郎、久保田万太郎といった大正作家の戯曲を「設定」「演出」「ト書き」といった観点から分析することで、新たな文学研究の可能性を探りたい。



②出版メディアの戦略・検閲（講義・演習）
 紅野謙介（日本大学教授）

伊藤整がD・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』翻訳を刊行したのが1950年。版元は戦前から良心的な文芸出版で知られる小山書店であった。しかし、これが刑法175条違反として摘発され、チャタレイ裁判が始まる。同時に『群像』では大岡昇平「武蔵野夫人」が連載され、ベストセラーとなり、映画化までされることになる。こうした一連の出来事を通して、占領末期における検閲の問題と作家、出版界の葛藤をとらえてみたい。

5. 資料の保存・公開・展観
 ①資料の保存・修理（実習）

和本の四つ目綴じ補修をします。文学館で所蔵している「中里介山文庫」（中里介山旧蔵書）を使用します。（太めの縫い針一本持参ください）

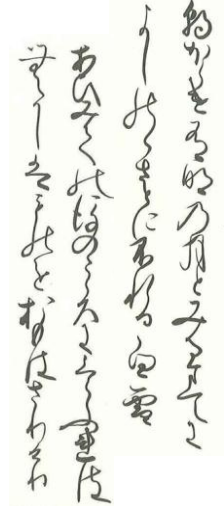


②資料の公開・展観（実習）

文学館が所蔵する資料をいかに公開・展観し、文学の魅力をいかに伝えるか、展覧会などを例に考えてみましょう。

6. 文学の周辺(2)
 ①文学と美術・音楽（講義・演習）
 中島国彦（早稲田大学名誉教授）

日本の近代文学の歩みは、同時代の美術や音楽と深いつながりのもとに形成されている。今年度は、木下杢太郎を取り上げ、文学作品が美術や音楽とどう絡まるのかを考えていきたい。戯曲「南蛮寺門前」、小説集『唐草表紙』を跡付けることは、この問題を考える格好の材料となっている。あわせて、森鷗外・夏目漱石・山田耕柁ら、同時代の芸術家とのつながりについても紹介したい。



②文学と映画（講義・演習）
 池内輝雄（近代文学研究者）

「昭和モダン」と言われる昭和初期の文学と映画について考える。特に堀辰雄「不器用な天使」を中心に、芥川龍之介「浅草公園一或るシナリオ」、ドイツ映画「ヴァリエテ」、ポール・モーラン（堀口大学訳）「夜ひらく」などを取り上げ、映画的手法と文体について考察する。「不器用な天使」は必読。